

授業科目：	社会福祉援助技術演習Ⅱ		
科目区分：	人間福祉学科専門科目	受講者数：	21名
担当者：	松宮 透高（保健福祉学部 人間福祉学科）		
アクティブ・ラーニングのタイプ：	行動型 ・ 参加型 ・ 複合型（※行動型・参加型ALを組み合わせ実施）		
キーワード（具体的なAL手法等）：	ロールプレイ，グループワーク		

1. 授業の概要と目標

本授業の目標は「相談援助を行う際に必要となる基礎的な知識と技術について、演習を通して実践的に習得すること」（シラバス）にある。この中で、自ら実習で体験した場面をロールプレイで「再現」し、その場面にみられた①当事者が置かれた環境，②当事者のニーズ，③支援者や支援環境が提供した支援，④その結果，⑤そこから考察したことおよびよりよい対応に向けた対応策，についてグループで検討し、それを「実演」してみることで、その場면을多面的に分析するという構成の授業を行った。

2. アクティブ・ラーニング導入の具体的な流れ

○科目名「社会福祉援助技術演習Ⅱ」第11回 授業テーマ「場面の検討とロールプレイ準備」

段階	指導過程・学修活動	指導上の留意点(工夫)	評価方法
導入	前回グルーピングした4～5人チームで着席。 この授業で取り組むこととその目的を改めて確認する(5分)		
展開	1)グループ協議(30分) メンバーの体験から1つを選択し、その状況と背景を検討する。 2)確定したらシナリオ化する。ロールプレイの役割を分担(ナレーター、登場人物)する。 3)各グループを回り、論点確認 表現したい論点を確認し、適宜アドバイスをし内容の充実を促す。 4)発表 1 グループを選び、発表をクラスで聴く。質疑とディスカッションを行い、改善案についても発表。 5)コメント 肯定的に評価し、改善案についての方向性の検討を促す。	各メンバーの体験を十分に相互理解した上で、皆の思いを乗せやすい場面を選ぶよう指導。主体的な参加度を上げるよう、役割分担をする。 発表内容が深く意義あるものになるよう、適宜アドバイスを示す。 努力や着眼点、グループの協力を積極的に評価し、モデリングできる要素を強調する。	議論や作業に参加しない学生がいないか確認し、適宜参加や巻き込みをグループ単位で指導する。
まとめ	次回、残りの発表を行うこと、さらに改善案の実演に向けた検討と準備を行うよう提示	発表への不安を軽減し、モチベーションを高めるような雰囲気づくり	コメントシートおよびワークの体験をレポートにまとめる。

3. 成果・効果

にぎやかなながらも課題への集中がみられ、受講学生が積極的に参画している様子が見られた。ロールプレイの発表においても、よく練られ、論点が明確な場面が描けていた。場面を具体的にすることで、その場面での支援者（実習生）の困難感が実感的に共有でき、より良い対応があったとすればどうすればよいか、また、どうしてそのような状況が発生したのかという重層的な背景への着眼もみられ、「表層的に見ていた場面に、思わぬ深い構造が隠れていたことに気づいた」といった感想がいくつか見られるなど、所期の目標を満たす教育効果が得られたと考えている。

4. 課題

実習体験自体が多様であり、その受け止め方もまた学生によって様々である。今回は見られなかったが、実習施設のあり方への強い疑問が呈され、ネガティブな方向からばかり検討して自らの学びや課題に焦点がなかなか当たらない学生もいる。そうした場合、「問題はあるが、もし自分が責任ある立場としてその問題に取り組むとすれば、どのようにアプローチするか」といった投げかけで、前向きな議論には進んでいく。また、4～5人チームで持ち寄った体験のうち1つを取り上げることから、全員の体験を詳細の検討することはできていない。加えて、実習への不安全感や、一種の傷つき体験がある場合、不用意に開示することで気持ちが揺れるリスクはある。常に、「言いたくないことは言わない」「ここで取り上げるテーマにタブーは無いが、外には持ち出さない」「自分たちは切り取られた一場面のみを見ているに過ぎず、また責任ある立場にも立っていないため、表層的にしか現場を捉えていないという限界がある。一方的な非難で終わることは学びにつながらない」といった投げかけはしている。とはいえ、問題に正面から取り組むことを避け問題点の否認を求めているように受け取られるのではないかと気を遣う。

5. 資料

とくに用いない。ポストイットカードに1枚に1テーマ、「忘れられないあの場面」を書き、皆の前で簡略に発表し、黒板に貼っていく。類似性の高いテーマは近くに固め、似た問題意識の学生でグルーピングをする。あとは、各小グループに分かれてシナリオ作成と演じる役柄を決め、発表の練習をする。